
言葉と想い

零・ZA・音

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
言葉と想い

【Nコード】
N4311A

【作者名】
零・ZA・音

【あらすじ】
僕は恋をした。だけど、この思いは伝えてはいけない。僕の中にしまっておかなければいけない気持ち。僕の恋した相手は妹なのだから……。

規則正しい電子音と心地よい揺れ。

その二つを感じながら、まどろみの中で覚醒していく意識。

……ピピピ、ピピピッ。

この音は目覚し時計の音だろう。でも、もう一つの”揺れ”はなんだ？

何とも言えない心地よい温もりを感じながら、もう一度眠りにつかうとしたところで、

「うおっ」

一際大きな揺れを感じて、目が覚めた。

朝 窓から差し込んでくる朝日が眩しい。今日は晴れたようだな……。ここ三日ほど雨が続いてうつつとうしかったが、今日は清しい青空。

それにしても、ちょっと寝過ぎたみたい。

僕の隣 ベット脇に膝を付いて座っている桃は、頬を膨らませて怒ってる。

「ごめん。すぐ朝ご飯にするから」

僕の声に頬を膨らませていた桃は、表情を一変させて微笑むと、小走りに部屋から出て行った。

その後姿を見ながら苦笑いを浮かべ、ベットから立ち上がる。

彼女は桃 僕の妹。たった二人きりの家族。

そして、今は喋れない……。

僕は急いで制服に着替えると、一階のリビングへと向かった。

リビングに入ると、桃がテーブルに着いて牛乳を飲んでいた。

僕の姿に気付いたようで、にこりと笑みを浮かべて席に着くように促してくる。

もちろん、喋れないのでその表情、仕草で読み取るのだが。

そのテーブルには、すでに二人文の朝食が用意されて、美味しそうな湯気をあげていた。

「桃が作ったの？」

恥ずかしそうに頬を染めて俯く桃は、コップを手に持ち、落ち着きがない。

普段は料理をしないので自信がないのだろう。と、言ってもテーブルに並んでいるのはトーストとハムエッグ、それに牛乳。特別難しいものは並んでいない。

「いただきます」

僕達の朝ご飯。僕と桃の二人きり。これがいつもの朝の光景。

ゆつくりと食べる桃を見ながら、僕もトーストを口に運ぶ。

桃は寂しいのだろうか？ 今のこの状況をどう思ってるのだろうか……。

僕達は本当の兄妹ではない。

朝ご飯を食べ終わり、僕達は学校へと向かった。

通学路を歩いく僕の隣で、桃はとても楽しそう。

桃は表情がとても豊か。

あの日 言葉を失ってから、桃は表情で会話するようになった。笑って、怒って、拗ねて、喜んで……。でも、あの日から一度も泣いていない。

「おはよう」

「あ……おはよう、聡史」

教室に着いた僕に声を掛けてくる友人 聡史。高校に入ってから出来た友達で、これまで色々な相談事をしてきた。でも、どうしても話せない事もある。

「どうした？ 元気ないぞ」

「ん？ …… 大丈夫だよ」

僕は曖昧に言葉に濁っていた。不思議そうな顔をしている聡史も、

「そっか…… ならいいが」

「心配かけてごめんね」

それ以上は聞いてくる事はなかった。

「ごめん」ともう一度謝る僕に、「気にするな」と笑みをこぼす聡史。

ありがとう…… 君の優しさに救われる時がある。僕の悩みを君が聞いたら、どう思うのだろうか。

僕の悩み 誰にも話せない悩み。友達にも、桃にも……。

「ところで、今日の朝さ……」

「ほんとにつ！」

その後、僕達はチャイムまでくだらない話をしていた。

今は僕の悩みは忘れよう。今は。

「ただいま」

玄関を開けると桃の靴があつた。どうやら先に帰って来ているようだ。

朝は一緒だが、帰りは僕が遅くなる事があるので、友達と一緒に帰る事が多い。それでも、たまに待っていて一緒に帰ろうとしている姿を見ると、なんとも言えない感情が沸き起こってくる。

なんて思考を巡らしていると、奥から足音が聞こえ、桃が小走りに出て来た。

顔に満面の笑みを浮かべて……。その笑顔が僕は好きだ。

僕は、桃の事を愛してる。

この気持ちは心の中にしまっておこう。誰にも言えない僕の悩み。言っではいけない僕の秘密。

僕の思いを知ったら桃はどうするだろう……。

晩御飯の後、リビングでテレビを見ている僕の元へ桃がやってきた。

僕の前以後で手を組んでいる桃は、何か悩みでもあるのか、表情が冴えない。

「……どうしたの？ 桃」

躊躇^{ためら}いがちに僕の横に座ると、テーブルの上に一冊の本を差し出した。

「……ん？」

^{おもむく}徐に頁を開いていく桃が、ある頁で手を止めて指さす。

そのページには、流行の遊園地を特集した記事が載っていた。

「……行きたいの？」

どこか不安げな顔をした桃は、戸惑いながらも頷いた。どこことなく遠慮しているようにも見えるが、何を遠慮しているのか分からない。でも、その瞳に一抹の不安と期待が見え隠れしているようで、

「いいよ」

そう答える僕を見て、表情を崩して笑顔になる。

本当に行きたかったのだな、と言う気持ちが伝わってきて、なんだが僕まで嬉しくなってきた。

「どこの遊園地に行きたいの？」

そう聞く僕の声に、少し表情を曇らせて頁のとある場所を指さしていく。

そこは近くの遊園地。

でも、そこは僕達にとって一番辛い場所。

「ここに行きたいの？」

ただ頷き、そのまま俯いてしまった桃。

桃は覚えている。その場所は辛い思い出の場所だった事を知っている。

なのに、何故？ その場所に行こうとするのか……。

「わかった…今度の日曜日に行こう」

でも、桃が行きたいのなら、僕はそれを断る事は出来ない。

驚いた様子で顔を上げて僕を見ている桃だが、次第に笑顔となり、嬉しそうに雑誌を持つと自分の部屋へと戻っていく桃を見送り、僕はテレビをぼんやりと眺めていた。

桃が選んだ遊園地　辛い思い出がある遊園地。

父さんと義母さんを失った場所……。

二年前のあの日　父さんと義母さん、そして桃は遊園地へと遊びに行った。

僕は大会が近いと言うという理由で、どうしても部活が休めなくて、桃は心底残念そうな顔をしていたのを覚えている。

そして遊園地に行く途中、3人を乗せた車は事故に遭い、父さんと義母さんは死んだ。

車は前半分は原形を残す事なく大破していたが、後部座席は無事だった。そこに乗っていた桃は外傷はほとんどなく一見無事のように見えたが

桃は言葉を失っていた。

それは義父と母を目の前でなくしたショックによるもので、こればかりは医師にもどうする事も出来ないと言われた。

僕は何も出来なかった。

苦しんでいる桃に言葉を掛ける事も出来ない自分に、無力な自分に、激しい怒りを覚えると同時に、桃を特別な存在のように感じている自分にも気付いた。

この感情を無くした人形のような顔をした桃に笑顔を取り戻せるのは自分だけだ。

そう心に誓って、今日までやってきた……。

日曜日 天気は、雲一つない青空が広がっていた。

「桃……次は何に乗る？」

パンフレットを見ながら聞く僕に、桃は元気よく指さしていく。

「よし じゃ、行こっか」

嬉しそうに前を走り出した桃が、振り返って僕に手招きをする。

その顔から笑顔が消える事はない。とても楽しそうに走って行く桃を見ながら、僕もその後を付いて走った。

今日は約束通り、遊園地に遊びに来ている。

桃は朝起きた時からとてもテンションが高くて、さすがの僕も一瞬戸惑ってしまうほどだった。そんな桃と一緒に来た遊園地は本当に久しぶりで、何をするのも楽しかった。

その後、桃と一緒に色んなアトラクションを楽しんだ。終始、笑顔の桃を見ると僕の心は、言いようもない気持ちで溢れかえってくる。今、この時を大切にしたい。この時間がいつまでも続いて欲しい。

……桃の笑顔をもっと見ていたい。

今だけは、桃を妹ではなく……一人の女性として、その思い出を胸に刻みたかった。

楽しい時間と言うのは過ぎるのがとても早い。

もう時刻は、赤焼けの空が広がる夕刻となっていた。朝からほとんど休みなく遊んでいたので、さすがの僕も疲れた。

「桃…… もう帰るかい？」

静かに首を横に振る桃は、躊躇^{ためら}いがちに僕の手を取ると、歩き出した。突然の事で驚いている僕に、桃は少し恥ずかしそうな笑みを浮かべ、先を急ぐ。

桃の手の温もり、優しい温もり。

繋がれた場所から伝わってくる桃の体温、桃の鼓動、全てが僕の身体に広がっていく……。

愛しい……桃の全てが愛しくて仕方がない。

先を歩く桃が歩みを止め、見上げていく。

桃が連れてきた場所　そこは観覧車。この遊園地の名物でもある大きな観覧車の前だった。

「…… コレに乗るの？」

頷く桃は僕の手を更に引いていく。

ゆつくりと、でもしっかりとした足取りで係員の前まで歩いて行く桃は、いつの間にか表情を強張らせていた。

「綺麗だね……」

桃は窓の外を眺めて、一度僕の方を向くと頷いて、また外へと視線を戻す。

…… どうしてここに来たのだろうか？

朝から僕の中にあつた疑問。いや、この遊園地へ行きたいと聞いた時から、僕の中にあつた疑問。

桃にとっては、一番思い出したくない辛い記憶が眠る場所のはず。なのにどうして……。教えて欲しい。桃の気持ちを……。 どうし

て、この遊園地なのか、を。

ふと視線を感じて顔を上げると、桃が僕のほうを見ていた。

「どうしたの？」

僕が聞いても何も答えず、ただ首を横に振るだけ。その表情は硬く、何かを決意したような雰囲気^{にじ}を滲み出していた。

「桃……どうしたの？」

言葉はない。当たり前だ　桃は喋れないのだから。

でも、何かを伝えたいような表情を浮かべ、それを迷っている風に見える。

「お腹、空いたの？」

ただ首を振る。僕は何を聞いてるんだろっ……そんな訳ないじゃないか。

桃の表情はそんなものではない。もっと違う何かを僕に伝えたいのだろっ。でも僕には、この表情が耐えられない。

「桃、どうし」

不意に視界に桃の顔が現れた、と思った次の瞬間には僕は話せなくなっていた。

決して、桃のように喋れなくなった訳ではなく、唇を動かせなかった。

「……んっ」

ゆっくり離れていく桃の顔。今、僕の唇は桃の唇で　桃の唇で

……。

優しく揺れる瞳から流れ落ちる一筋の光。頬を伝う光の粒は、次から次へと溢れては、頬を濡らしていく。

あの日以来、泣いた事がない桃が泣いている。

「……お……に」

空気が震えた。

ゆっくりと優しく、僕に聞こえた懐かしい声。

「……お、にい……ちゃ、ん」

懐かしい声。空気を震わせ僕の耳を、鼓膜を突き抜け、胸に届く。優しく響く声は、身体を、五感を、刺激していく。僕が聞きたかった声。愛しい人の声。

「だ……い、すき」

桃の声。

ゆつくりと、一音一音、確かめるように唇を震わせて紡がれていく桃の声。

「桃……お前、声が……」

少し戸惑いながらも、嬉しそうに頷いていく桃の瞳から涙は溢れ、頬を幾度となく濡らしていく。

桃の気持ち。それは僕と同じなのだろうか。兄として？ 家族として？ その”好き”にはどんな意味があるのだろうか。考えても分かるはずがない。でも、僕は

「桃……僕も。僕も、桃の事が大好きだよ」

「……うん」

ゆつくりと近づいてくる桃の顔。瞳を閉じ、僕の唇を。二つは一つに……。

僕の気持ちは通じた。桃の”好き”は、僕と同じだった。ただ、それが無性に嬉しくて、僕は涙を流していた。

ゆつくりと名残惜しそうに離れていく桃の顔は、恥ずかしそうに頬を染め、それ以上に嬉しそうに瞳を細めている。

僕の大好きな人。

観覧車の中。僕達は何度となく、お互いの気持ちを確かめるように唇を重ねた。

いつもの朝。

規則正しく鳴り響く電子音と、揺れている僕の身体。

「ふぁー……桃？」

ベットの淵に腰掛けるようにして、僕の身体を揺すっている桃が、恥ずかしそうに目を細めて微笑む。

「もう、朝か……それじゃ、すぐに　んっ」

不意に視界が暗くなり、次いで甘い匂いが鼻腔をくすぐ擦り、柔かい感触が唇に広がっていく。

「……桃」

恥ずかしそうに目を逸らしていく桃を、僕は抱きしめていた。驚いて目を丸くしている桃だが、僕の腕に手を添えていく。

「おはよう、桃」

頷きながら、僕に身体を預けてくる桃。

桃はまた喋れなくなってしまった。理由なんて分からなかったけど、僕は何故か悲しくはならなかった。

……桃は笑っていたから。

その笑顔は、今まで見たどの笑顔より綺麗で輝いていたから　。

きつと……父さんと義母さんが与えてくれた贈り物。

そう、桃の笑顔が教えてくれているようで、僕も自然と笑顔になっ
っていたんだ。

言葉にするにしても上手く表現出来なくて、でも言葉にしたくても、出来ない想いもある。

桃が教えてくれた大切な事。

僕の気持ち、桃の気持ち。
大切な家族。

大切な人。

大切な……。

僕達の時間は始まったばかり。ゆっくりと、優しく言葉にして、想いを伝えよう。

いつかまた桃の言葉を聞く、その日まで……。だから僕は言葉にするんだ。今の気持ちを。

「桃……愛してるよ」

ゆっくりと唇を重ねた僕を、桃は優しく微笑み、包み込んでくれた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4311a/>

言葉と想い

2010年10月8日15時43分発行